

地域ニュースを支える アドバンスコープ制作編成部

中学生が見た ニュース制作の舞台裏 〜スタジオにあふれる工夫〜

この夏、私は株式会社アドバンスコープの制作編成部Ma課の藤原優花さんを取材しました。藤原さんは高校時代は放送部に所属し、卒業後に株式会社アドバンスコープの制作編成部に所属し、あらゆる出来事を地元の人たちに発信し続けてくれています。



スタジオに入った瞬間、まず驚いたのは、数多く並ぶカメラや機械、そしてライトでした。プロの現場は迫力があり、普段テレビで見る映像の裏に、こんな空間が広がっていることを初めて知りました。

照明には細やかな工夫がありました。強い光で出演者の顔が白く飛んでしまわないよう、ライトに紙を貼ってやわらかい光にしていたのです。小さな工夫ですが、映像の印象を大きく変えることに感じました。また、カメラの映像を瞬時に切り替える操作も見せてもらい、放送を自然に見せる裏側には正確で緻密な作業があることを学びました。

重たいカメラを抱えて現場へ

編成部は人のチームです。「本のニュースをつくるために」「時間半から1時間ほど取材を行い、撮影から編集、放送までを一人で担当します。実際に取材用のカメラを持たせてもらいましたが、とても重たく、これを片手に現場を動き回るのは本当に大変だと感じました。地域のあちこちを駆け回って撮影し、その映像を自分の手で仕



上げていく姿は、まさにプロの仕事だと思いました。

ニュースは一人で仕上げますが、急ぎのときはお互いに協力し合い、少しでも早く正確に情報を届けています。放送前には必ず2人以上で内容を確認し、間違いないよう徹底しているそうです。地域住民に安心して見てもらうための努力を実感しました。

映像編集では「わかりやすさ」が大切にされています。耳だけでは流れてしまう情報はテロップで補足し、基本は黒枠に白文字、コーナー紹介では色を加えて臨場感を出しています。インタビューストでは要点を簡潔にまとめて表示することで、誰にでも理解できるように工夫しているのです。

さらに、映像だけでなく「音」も重要です。現場の環境音を残すことで、取材に行っていない人もまるでその場にいらるよう感じられるようにしているそうです。地域の出来事をただ伝えるだけでなく、そこでの空気や雰囲気まで届けようとしているのだとわかりました。

また、新しいお店のオープンを取材する時は、単に情報を伝えるのではなく、店主の想いや住民が知りたいことを盛り込みます。「見た人が関心を持ち、足を運びたいくなるニュース」にすることを大切にしているのです。

取材を終えて

地域ニュースは、私たちが日常的に目にするものです。しかし、その裏では6人の編成部が、重たいカメラを抱え、光や音に工夫を凝らし、正確さを守りながらつくっていることを知りました。

今回の取材を通じて、地域のニュースが「ただの情報」ではなく、そこに込められた努力や想いによって支えられていることに気づきました。私は中学生として動画編集に憧れていますが、同時に地域住民の一人として、これからも編成部のニュースを楽しみにしたいと思っています。

桔梗が丘中学校3年生
大久保朱莉

豆記者新聞編集後記

豆記者の皆さんに集ってもらって、それぞれテーマを話し合ったのが7月21日。英心高校の3人から「花火師」と言う仕事と発言があったが、26日の「名張川納涼花火大会」はもう目先。インタビュースト大丈夫だろうか？との不安をよそに、脇坂火薬(株)の脇坂晃治社長は「当日の朝、現地でおいししましょう」と気さくに了解して頂いた。これでこの記事の成功は間違いないと確信した。3人の記者は準備もすっかりし、花火大会のほぼ全てが簡潔に表現されている。「こんなにいい感じにまとまるとは思わなかった」と口を揃えて感激の様子であった。

「ADSで報道の現場を知りたい」と大久保朱莉さんは、副調整室でスライドボリウムを動かしたり、カメラを構えたり、放送の実践に大満足。制作部の藤原優花リーダーはじめ大変協力して頂いた。

取材先の皆様に感謝すると同時に、若い記者の奮闘には大いに感激した。

千種啓義